



監督・脚本・撮影・編集・製作：塚本晋也
 出演：趣里／塚尾桜雅／河野宏紀／利重剛／大森立嗣／森山未來

ほかけ

2023年／日本映画

配給：新日本映画社／95分

2023（令和5）年12月6日鑑賞

シネ・リーブル梅田

 みどころ

私は塚本晋也監督が大好き。『六月の蛇』（02年）（『シネマ3』359頁）は素晴らしかったし、『鉄男 THE BULLET MAN』（09年）（『シネマ25』179頁）も面白かった。そして、『野火』（14年）も『斬、』（18年）も！すると「戦争3部作」の最終作たる本作は、必見！

塚本監督の問題意識は闇市。とりわけ、「闇市の暗さといかがわしさ」と力強さらしい。しかして、その闇市を舞台とした、女、戦争孤児、復員兵、そして、テキ屋の男を主人公とした本作の出来は？そして、「空襲で家族を失った子供の目から見た、戦争と人間。」の物語の展開は？

新聞紙評での本作の評価は高いし、劇場も満席に近い。しかし、残念ながら私にはイマイチ……。画面の暗さは我慢するとしても、本作の問題提起に、私は“独りよがり感”が……。

——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*——*

◆本作のチラシには、『野火』『斬、』そして—— 戦争を民衆の目線で描き、現代の世に問う祈りの物語。」「生き延びた人々が抱える痛みと闇—— 塚本晋也が描く、戦後。」等の見出しが躍っている。本作は、『野火』（14年）（『シネマ36』22頁）、『斬、』（18年）（『シネマ43』308頁）に続く「戦争3部作」の完成だが、その出来は？出品されたベネチア国際映画祭での受賞はならなかったものの、新聞紙評では概ね好評。私の知人の評論家も絶賛していたから、こりゃ必見！

◆チラシには、更に「女が暮らす半焼けの居酒屋、片腕が動かない男との旅、空襲で家族を失った子供の目から見た、戦争と人間。」の見出しもある。私は「戦争と人間」と聞くと、五味川純平の原作を山本薩夫監督が壮大なスケールで映画化した『戦争と人間』（70・71・73年）（『シネマ2』14頁、『シネマ5』173頁）を思い出してしまふ。同作は、1930年代以降の日本の現代史を忠実に踏まえたうえでの、壮大な「戦争と人間」の物語だったが、

本作に見る「戦争と人間」は、戦後の闇市を舞台とした“ほんの小さな出来事”を描くものだ。

◆チラシには「火と、その揺れに合わせて姿を変える影。その影の中に生きる人々を見つめ、耳をすます。」の文字も躍っている。その“売り”のとおり、本作（のカメラ）は「影の中に生きる人々を見つめ」ているから、一貫してスクリーンは暗い。そして、本作は、半焼けになった小さな居酒屋で1人暮らしをしている女（趣里）の姿から始まる。塚本監督は「漠然と闇市というものに惹かれていました。その暗さといかがわしさと力強さと。」とのことだが、その意図を受けて、美術スタッフは見事なセットを作り上げている。

その中で、やけに目玉だけが目立つ女は、現在、NHKの朝ドラ『ブギウギ』で、コテコテの大坂弁を駆使しながら主演の福来スズ子役を演じている女優、趣里だから、その落差（？）にビックリ！

◆物語の前半は、女の家で、戦争孤児（塚尾桜雅）と復員兵（河野宏紀）が居ついてしまい、“擬似家族”のようになっていく物語だが、残念ながら私にもそれがイマイチ……。子供はほとんどしゃべらないから、私には彼が何を考えているのかよくわからないうえ、復員兵の“言動”にも、私にはかなりの違和感が……。そして、後半からは、戦争で右腕を失った復員兵でテキ屋の男（森山未來）が新たに登場し、「これぞ戦後！」とも言うべき、あっと驚く事件が展開していくが、私にはこの展開にもかなりの違和感が……。

本作は「空襲で家族を失った子供の目から見た、戦争と人間。」を描く塚本監督流の問題提起作だから、“キーマン”はこの子役になる。しかし、私の目には、この子供の牽引力による本作のストーリー展開には少し無理があるのでは……？

◆私は十数年前に白内障の手術を受けた後はよく見えるようになったが、さすがに来年75歳を迎える年になると、動体視力はもちろん、視野や明るさの面でも劣化が進んでいる。そのこともあって、私には本作のスクリーンの暗さが目立ってしまう。もちろん、これは塚本監督の意図的なもので、妻燐（ロウ・イエ）監督の「スパイもの」の名作『パール・バタフライ』（03年）（『シネマ 17』220頁）や『サタデー・フィクション』（19年）（『シネマ 53』274頁）等と同じだが、さすがに始めから終わりまでこの暗いトーンが続くと、しんどい。

そんな点から文句をつけるのはナンセンスだと思いつつ、本作の結末に私は“納得できない感”を持つとともに、「ああ、疲れた！」との実感が。

2023（令和5）年12月8日記